

幼児にとっての被援助と不快感情

— 幼児期の心理的負債の大きさに影響する要因の検討 —

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 泉 井 みずき

Receiving help and indebtedness for preschoolers Identify the factor that influences indebtedness in preschoolers.

The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University WAKUI, Mizuki

要 約

大人は援助を受けることに返報への負担である心理的負債を抱く。しかし、幼児は心理的負債を抱きづらいことが明らかになっている。本研究はこのような心理的負債の発達的变化の背景要因を明らかにすることが目的である。幼児が心理的負債を抱きやすい要因として第1調査では、援助者の違い(親しい・疎遠/大人・子ども)の影響を検討し、幼児が親しい子どもである友人からの援助に対して心理的負債を抱きやすいことが明らかになった。第2調査では幼児にとっての返報の意識の違いの影響を検討し、援助に対する特定の返報を自分ができると感じているか否かが幼児の心理的負債の大きさと関連していることが明らかになった。これらの調査から、人は幼児期に仲間から援助を受けることや、返報ができない自覚が生まれる中で援助を受けることに対して心理的負債を抱き始めることが示唆された。

【キー・ワード】 心理的負債, 被援助, 返報, 援助者, 幼児

Abstract

Adults feel indebt in receiving help. But, it is known that preschoolers don't feel indebt like adults do. The research was done to clarify the background factor of developmental change in indebtedness. In the 1st study, influence of helper(well known・first met/adult・child) was examined. The result shows that preschoolers tend to feel indebtedness to well known child; friends. In the 2nd study, the influence of reciprocation was examined. From the study, it became clear that the reciprocity for receiving help are able or not are related to preschooler's indebtedness. It was suggested that receiving help from friends and recognition that they cannot reciprocate make preschoolers become to feel indebtedness in receiving help.

【Key Words】 indebtedness, receiving help, reciprocation, helper, preschooler

問題と目的

援助行動とは、他者に利益をもたらす行為である。人は生活の中で様々な人からの援助を受け、時に誰かを援助しながら生活を送っている。人は他者から援助を受けると、そこに生じる利益や、援助者の優しさを感じ肯定的な感情を抱く。しかしその一方で、否定的な感情も同時に抱くことが示されている（西川, 1998 など）。Greenberg（1980）は、その理由として、被援助による自尊心への脅威、平衡関係の崩壊、さらには心理的負債をあげている。その中で心理的負債は援助を受けた際の返報意識から生じる負担感情で被援助時に生じる不快感情の理由の中で、最も返報行動と大きく関わり、返報行動を促進するという効果を持つ。

成人の場合、実際の生活の中で人から援助を受けることは多くはない。また、一般的に成人の返報能力は高く、返報にも多様な方法を用いることができる。さらに、援助を受けることで生じる心理的負債を抱くことを嫌う成人は「援助を受けない」ことを選ぶこともできる。しかし、援助行動を力及ばない所を他者が補助する行為も含まれると定義した場合、生きていくうえでの能力の制約から「援助を受けない」という選択肢を持たない人々もいる。例えば、幼児である。幼児について考えてみると、親や幼稚園や保育所の先生などが行う養育行動や保育行動の様々な部分は援助行動と捉えることができる。そのため幼児期は本人の認識には関わらず、母親や先生などの周囲の人間から援助を受ける機会が多い時期である。さらに、幼児の返報の能力や手段には限界がある。このような援助を受ける機会が多く、返報の能力や手段に制約がある幼児は、他者から援助を受けることをどのように捉えているのだろうか。

児童の被援助時の心理的負債を調査した DeCooke（1992, 1997）は、小学1年生が返報の重要性を意識していること、また返報ができなかったときには心理的負債を含む不快感情を持つことを明らかにした。さらに、3年生以降であれば大人と同様に被援助時の援助者のコストが高いと、未返報時の不快感情が高くなるなど、被援助状況により、返報ができなかったときの不快感情の大きさに影響することを明らかにした。一方、幼児に関してはこれまでの研究から、幼児は援助を受けることに対して「お返しすることは大切だ」と強く思っていることが明らかになっている（佐々木, 2000）。これは、幼児が心理的負債の前提となる返報に対する意識を強く持つことを示すものである。しかし、泉井（2006）が DeCooke（1992）と同様の方法を用いて幼児の未返報時の不快感情を測定した結果、返報へ強い意識を持っているにも関わらず、心理的負債を含む不快感情をあまり感じていないことが示された。これらの研究から、幼児期と児童期では被援助時の不快感情の捉え方が異なる可能性が考えられる。これに関して DeCooke（1992）や Greenberg（1982）は、被援助により生じた心理的負債を低減しようという動機は、幼少時からの社会化によって形成されると述べている。

ところで、成人は援助状況により心理的負債の大きさが異なることが明らかになっている（相川, 1988 など; Greenberg, 1980）。幼児が心理的負債を抱きにくい傾向があることは明らかになっているものの（泉井, 2006）、援助状況によっては心理的負債を抱きやすい状況があるのではないだろうか。本研究では本来心理的負債を抱くことが少ない幼児であっても心理的負債を感じてしまう状況はどのようなものかを明らかにする。このことは、幼児がなぜ、そしてどのような過程を経て大人のよ

うな被援助に対する心理的負債を抱くようになるのかという、被援助に対する心理的負債の発達の變化の要因を明らかにしていく上で示唆を与えることとなるだろう。

第1調査

第1調査では、援助者の違いにより生じる幼児の心理的負債の大きさの違いを検討する。援助者が被援助者にとって親しいか、親しくないのかという親疎の違いは成人では心理的負債の大きさを左右する要因の一つである。相川（1988）は、大学生では援助者が「親友」と「他人」の場合「親友」の方が心理的負債が大きいかを示した。これは、大学生にとって親友とは、将来にわたり相互作用を続けていく可能性がある対象であるため、親密な対人関係を維持するために、返報しなければいけないという心理的負債が生じやすいからである。しかし、児童期の未返報時の不快感情について調べている DeCooke（1992）は、1, 3, 5年生では「親友」と「ちょっとした知り合い」では不快の程度に違いはないことを示した。DeCooke（1992）は、この理由を児童では「親友」と「ちょっとした知り合い」の間に明確な違いがないためであるとした。しかしながら「親友」と「ちょっとした知り合い」のどちらにもその後相互作用する可能性は存在するため、未返報時の不快感情の大きさに差が生じなかった可能性も考えられる。では幼児の場合、援助者が親しい人物か、その後相互作用が期待されないような親しくない人物かによって心理的負債の大きさは異なるのだろうか。

ところで、幼児が日常的に援助を頻繁に受ける相手は大人である。これは大人が幼児に比べて生活の中でできることが多いということに加え、大人が「子どもを守るべき存在」であるためだと考えられる。幼児の生活は実際、様々な大人からの援助抜きには成立しない。幼児は日常頻繁に受ける大人からの援助をどのように受け止めているのだろうか。幼児はまた、幼稚園や保育所の生活の中で自分と同年齢の子どもから援助を受ける経験も持っている。幼児は自分と対等な子どもからの援助をどのように受け止めているのだろうか。援助者が大人であるのか、子どもであるのかは幼児の援助の受け止め方、そして心理的負債の大きさにどのような影響を及ぼしているのだろうか。

そこで、本調査では援助の相手の親しさの違いと、援助者が大人であるか、子どもであるかということが心理的負債の大きさにもたらす影響を検討する。本調査では、援助者として友だち（親しい子ども）・初めて会う同年齢（疎遠な子ども）・母親（親しい大人）・初めて会う大人（疎遠な大人）を設定した。

幼児は親しい相手からは、援助を受ける頻度も多いことが考えられるが、ひとつひとつの援助に対して返報を行うことは困難である。そのため、幼児はよく援助を受ける親しい相手に返報できないことに慣れていて考えられる。そのため、親しい相手から援助を受けることに対しては心理的負債は生じないだろう。逆に、援助者が疎遠で援助を受ける機会がまれである場合、その人に対する返報ができないことには慣れてはいないと考えられる。そのため、疎遠な相手に対して心理的負債が生じやすいであろう。

また、幼児は大人が「子どもを守るべき」立場にあることや、能力の違いから、大人に援助を受けることは当然のことと捉えている可能性が考えられる。そのため、大人から援助を受けることに対し

ての心理的負債は低く、自分と同等の立場にある同年齢の子どもから援助を受けることよりも、心理的負債を抱きにくいのではないだろうか。

本調査では、先行研究（泉井，2007a）から得られた幼児の「助けてもらった経験」についての回答から得られた場面と、相川（1989）の心理的負債の大きさによる援助事態の分類を参考に、3つの場面（怖い犬から助けてもらう、鉛筆を貸してもらう、転んだ時に助けてもらう）を選択し、援助場面とした。まず、被援助時の返報の重要性について尋ねる。これは、心理的負債を抱く前提となる互惠規範が確立しているかを確認するものである。その後、心理的負債の大きさの質問方法として、被援助後の返報ができなかったという状況を設定し、そのような状況で「お返しをしなければいけない」ということに対してどの程度不快感情を感じるのか（いやな気持ちになるか）を尋ねることとする。心理的負債は、本来は援助を受けたことに対する返報を行うまでに感じる返報への「負担感」である。しかし、幼児にとって心理的負債を成人のように「負債」「負担」という言葉を使用することで尋ねるのは難しい。そのため、返報ができないという状況を設定することで、そこに生じる不快感情を尋ね、その程度を本研究における「心理的負債」とする。

方 法

調査期間：2007年10月中旬

調査協力児：千葉市内の私立Y幼稚園の年長児30名

（男子15名，女子15名，平均月齢72.3ヶ月 $SD=3.40$ ）。

材料：主人公を紹介するキャラクターカード、被援助場面を説明する図版（各1枚）、援助者を示す図版（4枚）、重要度得点・「心理的負債」得点を示す図版（各1部）を男女別に準備した。

手順：幼稚園の会議室で個別面接調査を行った。ラポール形成後、主人公となる被調査者と同性のキャラクターをキャラクターカードを用いて紹介し、「今日はこの子のお話をいくつかするからね」と言い、課題へと移行した。主人公の被援助場面（犬から助けてもらう、鉛筆を貸してもらう、転んだ時に助けてもらう）をランダムに選択し、図版を使用しながら援助が必要となった状況を説明した。次にランダムに援助者（友だち、初めて会う年長児、母親、初めて会う大人）を選択し、その援助者に援助を受けたときの返報の重要度得点、返報できないときの「心理的負債」を尋ねた。一つの被援助場面につき4人の援助者全ての返報の重要度・「心理的負債」質問をした後、次の被援助場面へと移行した。

返報の重要度質問：調査協力児に対し提示した援助状況において援助者に返報することは大切なことであるか否かを尋ねた。「大切だ」と回答した調査協力児については、その後「返報はどの程度大切か」を3段階で尋ねた。その際、小さい順に3つの正方形が並ぶ図版を用い、「大切だという気持ちが増えていくよ」と3つの大きさが異なる正方形が持つ意味を説明し、自分ならどの程度「大切だと思うか」を3段階で選択してもらった。返報を行うことは「大切ではない」と回答した調査協力児に対してはその後、重要度質問、不快感情質問は行わなかった。これは、重要度質問が被援助に対し返報できない場合の不快感情の前提となっており、返報の意志がない、つまり返報が重要ではないと

捉えている場合は、不快感情が生じ得ないと考えられるためである。

「**心理的負債**」質問：調査協力児に提示した援助状況において、「援助を受けて返報したいと思っ
ていてもそれができなかった時、嫌な気持ちになる人もいるし、ならない人もいる」と説明した。そ
の上で「嫌な気持ち」「嫌な気持ちではない」表情の図版を示し、もし自分が主人公であったならば、
どちらの表情になるかを尋ねた。この時点で「嫌な気持ちではない」という表情を選んだ被調査者に
ついてはその時点で質問を終了し、次の話に移行した。「嫌な気持ち」を示す表情を選んだ調査協力
児には、さらにどの程度「嫌な気持ち」であるかを重要度と同様、3つの大きさが異なる正方形が順
に並ぶ図版を用いて3段階で評定してもらった。その際、「いやな気持ちの大きさが増えていく」と
小さい正方形から順に指で指しながら正方形の大きさの違いの意味を説明し、自分ならどの程度「嫌
な気持ちか」を3段階で選択してもらった。

得点化：重要度に関しては「大切だとは思わない」という回答を0点とし、お返しの大切さを示す一
番小さい正方形を選択した場合を1点、中間を選択した場合を2点、最も大きな正方形を選択した場
合を3点とした。「心理的負債」でも同様に、「いやな気持ちにはならない」という回答を0点とし、
いやな気持ちの大きさを示す一番小さい正方形を選択した場合を1点、中間を選択した場合を2点、
最も大きな正方形を選択した場合を3点とした。さらに、重要度・「心理的負債」のそれぞれの得点
で3つの援助場面の得点を加算し、重要度得点、「心理的負債」得点(0-9点)とした。

結果と考察

返報の重要度：大人・子ども、親・疎別の返報の重要度得点を示す(表1)。全体の重要度の平均得
点は5.84点($SD=2.53$)であった。幼児は援助に対しての返報を大切であると感じている。大人・子
ども(2)×親・疎(2)×性別(2)の3要因混合計画の分散分析を行ったところ、親疎の主効果のみが有
意であり($F(1, 28)=8.01, p<.01$)、他の主効果、および交互作用は有意ではなかった。親疎の違いに
関しては、疎遠な相手よりも親しい相手に援助を受けた場合のほうが返報の重要度が高いことが明ら
かになった。これは予想とは逆の結果とはなったものの、相川(1989)で大学生に見られた結果(知
らない人よりも知っている人に助けてもらった方が心理的負債は高い)と同様の方向を示すものであ
り、幼児も親しい人への返報を多く行う方が初めて会った人に返報するよりも重要だと感じていた。
幼児の中では幼稚園や保育所で「やさしくしてもらったら(助けてもらったら)そのお返しをする」
ことがルールとなっているようである。しかし、この場合、対象は「お友だち」、や「先生」など幼
児の身近にいる人たちである。幼児は親しくない人から援助を受けてもそれに対し返報する習慣がな
い、あるいは親しくない人から援助を受ける経験自体がないのかもしれない。

「**心理的負債**」:「心理的負債」は、「返報しなければいけない」と思うことが前提となる。そのため、
本調査では重要度得点質問において「返報が必要ではない」と回答した場合、「心理的負債」は生じ
ていないと解釈し、0点を与えた。3つの被援助場面、4人の援助者全てに対して返報は重要ではな
いと回答している幼児(6名)に関しては、返報自体への意識がとても弱く、さらに1度も「心理的負
債」に関する質問を行えなかったという点からも、以後の「心理的負債」得点の分析からは除外した。

表 1 重要度得点

	親疎	
	親しい	疎遠
子ども	友だち 6.47 (2.93)	初めて会う年長児 5.53 (3.09)
大人	お母さん 6.17 (2.47)	初めて会う大人 5.20 (3.00)

()内はSD

表 2 「心理的負債」得点

	親疎	
	親しい	疎遠
子ども	友だち 4.21 (3.09)	初めて会う年長児 3.75 (2.45)
大人	お母さん 3.33 (2.87)	初めて会う大人 3.58 (3.09)

()内はSD

大人・子ども、親・疎別の「心理的負債」得点を示す(表2)。「心理的負債」得点の全体の平均得点は3.75点($SD=2.73$)であり、得点は高いものではなかった。これは、前回の調査(泉井, 2007b)で得られた幼児は返報ができないことにあまり心理的負債を抱かないという結果と一致するものである。大人・子ども(2)×親・疎(2)×性別(2)の3要因混合計画の分散分析を行ったところ、大人・子どもに有意な主効果が見られる傾向があった($F(1, 22)=3.12, p<.10$)。しかし、その他の主効果、および交互作用は有意ではなかった。大人・子どもに関しては、援助者が自分と同年齢の子どもの場合の方が、援助者が大人であった場合よりも「心理的負債」は高い傾向が明らかになった。

重要度得点が全体的に高く、「心理的負債」得点が全体的に低かったことは幼児が返報を重要であると感じているものの、被援助時に心理的負債を抱きにくいという先行研究(泉井, 2006)の結果を支持する結果となった。特に、援助を頻繁に受ける、幼児を助けるべき立場にいる母親からの援助についてはこの様子が明確に見られた。幼児にとって母親からの援助は日常の生活には不可欠ではあるが、その数の膨大さゆえに各々全てへの返報は不可能である。返報ができない場合、心理的負債はネガティブな感情を蓄積させるものにしかない。このように考えると、幼児が母親からの援助に返報意識に見られるうれしさやありがたさを感じていながら「心理的負債」を抱かないことは、母親からの助けの中で生活している彼らにはストレスをためないための重要な手段となっているのであろう。

また、全体的に心理的負債を抱いていない幼児ではあったが、援助者が親しい人物である場合のほうが返報への意識が強く、援助者が自分と同じ子どもであるほど「心理的負債」の得点が高い傾向が見られた。このことから、「心理的負債」得点において交互作用こそ見られなかったものの、幼児にとって最も心理的負債を抱きやすいのは親しい子ども、すなわち「友だち」であることが示唆された。自分と同じ程度の能力を持つ身近な友だちに援助を受ける経験が「心理的負債」を抱き始める過程の中では重要なものかもしれない。母親や先生が自分を守ってくれて当たり前存在である一方、自分と対等の他者である友だちに助けられることから心理的負債を意識するようになるのであろう。幼稚園や保育所で仲間と出会い、その中で助け・助けられるなどの生活を送ることが、DeCooke(1992)やGreenberg(1980)が述べる心理的負債の形成に重要な社会化を促進すると考えられる。

第2調査

第1調査では、被援助状況として援助者に着目し、幼児は身近な友だちに援助を受けるということから心理的負債を抱くようになることが示唆された。次に、第2調査では被援助者自身の被援助状況として、被援助者が持つ心理的負債の前提である「返報」の意識に着目し、幼児の返報に対する意識の心理的負債への影響を明らかにしていく。

成人が被援助時に心理的負債を抱く背景には、返報を意識するだけでなく、その先に自分ができる返報を漠然と考え、どのような返報が行われるべきなのかが想定されていることが考えられる。このことから、心理的負債を抱きにくい幼児であっても返報するものが明確に定まっていれば、自分が返すべきものを「現在まだ返していない」という負担感情が明確となり、心理的負債を感じやすくなるのではないだろうか。そのため、返報の明確・不明確性は幼児の心理的負債に影響を及ぼすことが考えられる。

さらに、何を返報すればいいのかが明確であった場合、想定される返報内容によっても心理的負債の大きさは異なってくるだろう。返報には被援助者の所有する資源による返報と、被援助者の持つ能力を使う返報の2つが考えられる（もちろん、双方を使用する場合もある）。他者から与えられることでしか得られない資源による返報よりも、自分の持つ能力で解決できる返報のほうが、「返す」ことへの意識が強くなるために、返報への負担感が高いのではないだろうか。そのため、このような返報に必要な特性の違いもまた、幼児の心理的負債の大きさに影響を及ぼすことが考えられる。

また、自分にとってその返報ができるものなのかという自信や能力の有無も心理的負債の大きさに影響を及ぼすであろう。DeCooke（1997）は、勉強が不得意な小学生では、勉強に関して援助者に負担がかかるような大きな援助を受けた場合でも、負担が小さい場合でも未返報時の不快感情に変化がないことを示した。一方、勉強が得意な生徒は援助者の負担が大きい場合の方が未返報時の不快感情が高かった。勉強が不得意な生徒の間で援助者の負担による差が見られなかったことを、DeCooke（1997）は、勉強が不得意な生徒は大変な援助を受けた際に「そんな大変なことへのお返しは自分にはできない」と考えるために大きな援助でも小さな援助でも不快感情に差が見られなかったのではないかと考えた。このことから、生活能力が高くはない幼児にとってのお返しが「自分にはできない」「自分にはできない」という思いも返報の重要さや、心理的負債の大きさや発生に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

そこで、第2調査では返報の明確性の有無、返報の特性、その返報を行うことができるか否かが心理的負債の大きさに与える影響を検討するために2つの課題を行う。課題Aでは返報内容の明確性の有無とその返報ができるか否かの自信の心理的負債の大きさへの影響を検討する。課題Bでは返報の特性の違い（資源・能力）と、その返報が行えるか否かの心理的負債の大きさへの影響を検討する。返報の特性の違いを比較するためには返報の内容が明確である必要がある。そのため、課題Bでは課題Aにおける自信とは異なり、実際に返報ができるだけの力がある場合とない場合を比較する。

なお、本調査では援助者としては、第1調査から幼児が返報の重要性を強く持ちやすく、「心理的負債」が比較的意識されていると考えられた「友だち」を援助者として設定する。また、心理的負債

の大きさの質問方法としては第1調査同様、被援助後の返報ができなかったという状況を設定し、そのような状況でどの程度「お返しをしなければいけない」ということに対して不快感情を感じるのか(いやな気持ちになるか)を尋ね、そこで生じている不快感情を「心理的負債」とする。

方 法

調査期間：2008年1月下旬から2月上旬

調査協力児：千葉市内の公立保育所に通う年長児30名、および、私立幼稚園に通う年長児6名、男女各18名、計36名(平均月齢75.97ヶ月、 $SD=3.61$)。

材料：援助状況の説明図版(3枚、男女別)、課題補助図版(課題A、課題B各2部、それぞれ男女別)、調査用紙。

手順：個別の面接調査を行った。ラポール形成後、幼児に保育所・幼稚園における被援助経験を尋ねた。回答される被援助経験の有無に関わらず、調査者から被援助場面(探し物を一緒に探してもらう、転んだときに起こしてもらう、怖い犬を追い払ってもらう)を提示し、様々な被援助が生活の中にあることを調査協力児に確認した。そのうえで、被援助時に援助者に対して返報を行うことは重要なことだと思うかを尋ねた(助けてもらった人にそのお返しをすることは大切なことだと思いますか)。その後、課題A、課題Bを行った。

課題Aは返報内容明確性の有無と自信の有無の心理的負債への影響を検討するための課題である。特定の被援助場面を設定せずに、「お友だちに助けてもらった子(調査協力児の性別に合わせた)が、助けてくれたお友だちにお返しをしようと思っている」ことをつげ、その際に「何を返報していいのかわかっている、その返報を行う自信がある」「何を返報していいのかわかっているが、その返報を行う自信がない」「何を返報すればいいのかわからないが、返報を行う自信はある」「何を返報すればいいのかわからず、返報を行える自信がない」という4つの状況の一つずつランダムに提示した。それぞれの状況ごとに、「援助者がいなくなってしまうため結局返報は行えなかった」と続け、その際に「返報をしなければいけないと気が重くなっていやな気持ちになる」、「そのようには考えず、いやな気持ちにはならない」をそれぞれの表情を示した図版を用いて選択してもらった。「いやな気持ちになる」と回答した場合、3つの大きさの異なる正方形が順に並ぶ図版を用いながら3段階でいやな気持ちの程度を回答してもらった。その際、正方形を小さい順に指差しながら「いやな気持ちの大きさが増えていくよ」と正方形の大きさの違いの意味を説明した。「いやな気持ちにはならない」と回答した場合は、次の話に移行した。

課題Bは返報の特性とそれが自分に可能であるか否かの心理的負債の大きさへの影響を検討するための課題である。特定の被援助場面を設定せずに「お友だちに助けてもらった子(調査協力児の性別に合わせた)が、助けてくれたお友だちにお返しをしようと思っている」ことをつげた。その際に「援助者が折り紙を折ってほしいと思っていることを知っていて、自分にはその折り紙を折ることができるのでそれでお返しをしようと思っている」「援助者が折り紙を折ってほしいと思っていることを知っており、お返しにそれをしてあげたいが自分は折り紙を折ることができない」「援助者がお菓

子がほしいと思っていることを知っていて、自分はお菓子をたくさん持っているのものでそれでお返しをしようと思っている」「援助者がお菓子がほしいと思っていることを知っており、お返しにお菓子をあげたいが、自分はお菓子を持っていない」という4つの状況をランダムに提示した。それぞれの状況ごとに、「援助者がいなくなってしまうため結局返報は行えなかった」と続けた。その際に「返報をしなければいけないと気が重くなっていやな気持ちになる」、「そのようには考えず、いやな気持ちにはならない」をそれぞれの表情を示した図版を用いて選択してもらった。「いやな気持ちになる」と回答した場合、いやな気持ちの程度を図版を用いながら3段階で回答してもらった。その際、課題Aと同様、正方形を小さい順に指差しながら「いやな気持ちの大きさが増えていくよ」と正方形の大きさの違いの意味を説明した。「いやな気持ちにはならない」と回答した場合は、次の話に移行した。

課題B終了後、お礼を言い、調査を終了した。

得点化：課題A、課題Bそれぞれにおいて、返報ができなかったときに不快感情がないと回答した場合を0点とし、その後の3段階の不快感情を1-3点とすることで、0-3点の4段階尺度と考え、本調査ではこれを「心理的負債」得点とする。

結 果

被援助時の返報の重要性について、36名中34名の幼児が「大切である」と返答した。36名中2名は「大切ではない」と回答した。

課題A：「心理的負債」得点の平均点は1.15 ($SD=1.02$)であった。返報内容の明確性(明確・不明確)×自信(有・無)の2要因の分散分析を行ったところ(表3)、自信の主効果に有意な傾向があり($F(1, 35)=1.56, p<.10$)、返報を行える自信がない場合、返報を行える自信があった場合より「心理的負債」が高いようであった。その他の主効果および交互作用は見られなかった。

課題B：「心理的負債」得点の平均得点は.91 ($SD=.91$)であった。返報内容(能力・資源)×返報力(有・無)の2要因の分散分析を行ったところ(表4)、有意な主効果は見られなかったが、交互作用に有意な傾向が見られた($F(1, 35)=3.16, p<.10$)。多重比較を行ったところ、返報に資源が必要な場合には能力の有無で得点には差はないが、返報に能力が必要な場合の返報能力の有無の得点に差が見られ(LSD法, $p<.05$, 図1)、返報に能力が必要な場合、返報能力がなかった場合のほうが、返報を行う能力があった場合に比べ、「心理的負債」が高かった。

表3 課題A「心理的負債」得点

		返報内容の明確性の有無	
		明確	不明確
返報の自信	あり	平均値	0.92
		SD	(1.18)
	なし	平均値	1.31
		SD	(1.24)

表4 課題B「心理的負債」得点

		返報特性	
		能力	資源
返報力	あり	平均値	0.69
		SD	(.89)
	なし	平均値	1.17
		SD	(1.28)

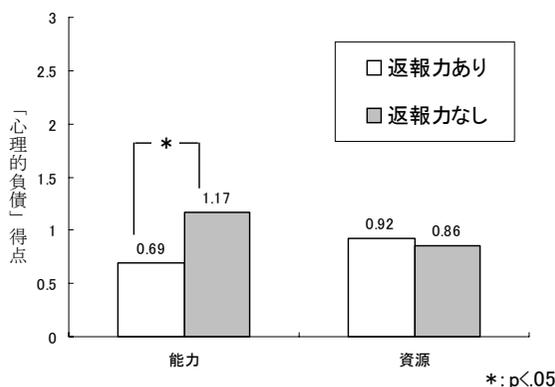


図1 課題B「心理的負債」得点

考 察

返報の重要性に関しては、これまで行ってきた研究同様、ほとんどの幼児（36名中34名）が「助けてくれた人にお返しすることは大切なこと」と考えていた。「助けてくれた人にお返しすることは大切なことではない」と回答していた2名の幼児の「心理的負債」得点は課題A、課題B全ての状況で0点であり、本調査で提示したいかなる状況でも返報できないときに心理的負債は生じないと返答していた。返報の重要性は互恵規範の存在を示すものであり、心理的負債の前提となっているものである。そのため、返報が重要ではないと回答した2名の「心理的負債」得点が全ての課題で0点であったことは妥当だったであろう。ただし、課題A、課題Bの両課題において幼児の「心理的負債」得点の平均点は約1点であり、あまり得点は高くはない。先行研究（泉井，2006）においても、幼児はもともと心理的負債を抱きづらいことは明らかであり、本調査でも同様の結果になった。

しかしその中で、課題Aと課題Bにおける能力を必要とする返報の場合に共通した結果として、自分がその返報を行うことができるか否かが幼児の「心理的負債」の大きさの変化に影響する可能性が伺え、幼児は返報することができない場合のほうが、返報することができる場合よりも「心理的負債」が高い傾向が見られた。DeCooke（1997）は児童が「自分にはその返報はできない」と思うことで、返報の重要性や重みが軽減し、そのため返報できないことへの不快感情も低下する可能性を報告したが、本調査で得られた幼児の結果は逆で、幼児の「自分にその返報はできない」という意識は、「心理的負債」を高めていた。生活するうえでの能力が高くはない幼児にとって、返報が自信・能力の不足によりできないということは、その援助に対しての返報をまったく行うことができないことを意味する。そのため、大切だと感じている返報を、今後も行うことができないという意味で「心理的負債」が意識されたことが考えられる。逆に、本調査においても自信や能力がある場合に返報が行えなかったときは、「明日になったらできるからいやな気持ちはしない」「会ったときにきっと何かできるからいやな気持ちはしないよ」などと「心理的負債」を感じない理由を述べた幼児もいた。このように、自分の返報の能力や自信についての理解は、幼児が「心理的負債」を抱くためのきっかけの一つで考えられる。しかし、DeCooke（1997）から考えると、自分にその返報ができるか否かの認識の

心理的負債への影響は発達につれ逆の方向に変化する可能性が考えられる。今後は自己の能力や自信などを日ごろからある程度正しく認識できる年齢の児童にも同様の調査を行うことで、上記のようなシフトチェンジの時期を考えていく必要があるだろう。

全体的考察

本研究では、第1調査、第2調査に共通して、幼児の「心理的負債」得点が比較的低かったことから、これまでの研究同様、幼児期は心理的負債を抱きにくいことが確認された。さらに、第1調査からは、幼児が母親に対しては返報の重要性は意識しつつも心理的負債を抱く可能性が低いこと、同じ年齢の友人からの援助に対して心理的負債を抱きやすい可能性が示唆された。また、第2調査からは、返報ができるか否かが幼児の心理的負債の大きさと関連している可能性が伺えた。

幼児期とは、他者から援助を受けることによって日常生活が成り立っている時期である。しかし、受けた援助の各々に対して心理的負債を抱くことは、返報をする能力も十分に備わっていない幼児にとってはストレスの蓄積にしかない。特に、第1調査から明らかになったように、日常最も援助を受ける機会が多い母親の援助に対しては返報の意識はあるが、心理的負債はあまり抱いていない。一方、日々「助けられて当たり前」という存在ではない友だちからの援助に対しては、返報意識も強く、心理的負債も比較的高い。このように、幼児はよく助けてもらう大人に対しては特に心理的負債を抱かないことで、助けられる必要がある日常の生活を送りやすいものになっているのではないだろうか。そして、そんな中で「当たり前」には助けてはもらえない友だちからの援助を受けることで、心理的負債を意識できるようになっていくのではないだろうか。

さらに、お返しをする自信や能力もまた心理的負債の大きさに影響しており、幼児の「お返しができない」という認識は心理的負債を増大させる可能性が見られた。幼児の有能感が高いことがこれまでの研究から明らかになっている（中澤、1996）。有能感の高い幼児にとっては、「できない」ということ自体がかなり大きな負担となっていることも考えられた。しかし、実際には幼児は日常生活で「できない」ことが多い。自分の持つ能力や資源を正確に知り、自分には「できない」ことについても正確に判断できるようになることも心理的負債を抱くようになるためには必要なだろう。このことから自己の「できる」「できない」を正確に判断しづらく、「できる」と考えやすい幼児にとって心理的負債は抱きにくいものであることが考えられた。また、幼児の自分に「できる」「できない」という意識は、周囲の友人との比較から生まれることも考えられる。このことから、幼児にとっての仲間関係は心理的負債を抱く上できっかけとなるものなのかもしれない。今後は、自己の返報能力の認識が正確にできるようになる年代にも焦点を当てていくことで、返報能力の認識の心理的負債の影響を検討する必要がある。

幼児にとっては抱くメリットがない「心理的負債」も、発達につれ社会生活を送る上で重要な意味を持つようになっていく。このような変化が、なぜ、どのように生じるのかをさらに詳しく検討していくことは、「不快感情を持たない」という側面から幼児の肯定感を捉えていくことにもつながっていくだろう。

引用文献

- 相川 充 (1988). 援助に対する被援助者の認知的反応に関する研究 宮崎大学教育学部紀要 社会科学, **63**, 37-48.
- 相川 充 (1989). 心理的負債の大きさによる被援助事態の分類 宮崎大学教育学部紀要 社会科学, **66**, 1-11.
- DeCooke, P.A.(1992).Children's understanding of indebtedness as a feature of reciprocal help exchange between peers. *Developmental Psychology*, **28**, 948-954.
- DeCooke, P.A.(1997). Children's perceptions of indebtedness : The help-seekers perspective. *International Journal of Behavioral Development*, **20**, 699-713.
- Greenberg, M. S.(1980). A theory of indebtedness. In K.Gergen, M.S.Greenberg, & R.H.Willis (Eds.) *Social exchange : Advances in theory and research*. Pp.2-26 New York : Plenum Press.
- 中澤 潤 (1996). 社会的行動における認知的制御の発達 多賀出版
- 西川正之 (1998). 援助研究の広がり 松井豊・浦光博(編) 人を助ける心の科学 Pp116-148. 誠信書房.
- 佐々木裕子 (2000). 幼児の返報行動における社会的情報処理 広島大学教育学部紀要 第3部 **49** 347-355.
- 泉井みずき (2006). 被援助に対する心理的負債感とその規定要因の発達の变化 千葉大学大学院学校教育専攻幼児教育分野 2006年度修士論文 未刊行.
- 泉井みずき (2007a). 幼児にとっての被援助と不快感情 (中間報告) 発達研究 **21** 145-150.
- 泉井みずき (2007b). 幼児にとっての被援助とは 日本教育心理学会第49回 文教大学 大会発表論文集 630.

謝 辞

本調査にご協力いただきました多くの方々にも心よりお礼申し上げます。また、論文の作成に当たり貴重なご助言・ご協力をいただきました千葉大学の中澤潤教授に心からの感謝を申し上げます。